

# 聴覚障害者による災害に対する事前準備と意識

北村 弥生 国立障害者リハビリテーションセンター研究所

[kitamura-yayoi@rehab.go.jp](mailto:kitamura-yayoi@rehab.go.jp)

<http://www.rehab.go.jp/ri/fukushi/ykitamura/kitamurayayoi.htm>

**目的:** 本研究では、聴覚障害者による災害に対する準備状況を明らかにすることを目的とする。

**背景:** 災害時に、聴覚障害者は情報入手に困難があるために、避難行動の判断が遅れること、死亡率が高いこと、避難所や在宅での生活に不便があること、不適切な行動をして非難されやすいこと、孤独感を持つことが指摘されている。また、避難訓練においても情報が十分に伝わっていないことも報告された。しかし、聴覚障害者が災害に対して、どのような準備をしているかは知られていない。

## 方法:

・リクルート: 所沢市社会福祉協議会の協力を得て、同市手話通訳派遣事業及び要約筆記派遣事業利用者70~80名と登録手話通訳者26名、登録要約筆記者31名に広報して募集し、聴覚障害者9名と登録手話通訳者と要約筆記者(以下、支援者)7名の参加を得た。

・「聴覚障害者に対する支援状況と望ましい備えに関する講演」(約1時間)  
 ・質問紙法による調査: 災害に対する準備と災害時の支援について: 手話通訳者待機  
 ・類似の調査を所沢市の11行政区区の中の一つ区の民生委員福祉部会32名に対しても実施した。

表1 聴覚障害者と支援者の災害準備状況 (%)

	聴覚障害者	支援者
最寄の避難所の場所を知っている	88.9	< 100
所沢市の「防災ガイドブック」を読んだことがある	66.7	< 85.7
調査時に懐中電灯を持っている	55.6	> 28.6
調査時に、パンダナを持っている	44.4	< 85.7
調査時に、NTT手帳を持っている	44.4	> 0
地域の防災訓練に参加したことがある	44.4	< 71.4
飲料水を備蓄している	44.4	< 85.7
所沢市のほっとメールに登録	33.3	> 0
食料を備蓄している	33.3	< 100
調査時に、笛(または笛に代わるもの)を持っている	22.2	28.6
簡易トイレを備蓄している	11.1	< 28.6
避難所で近くの人に筆談を依頼できる	66.7	57.1
最寄の避難所に、知り合いの支援者/聴覚障害者はいる	44.4	> 14.3
災害時に不安がある	44.4	> 28.6
避難所の受付で、アナウンスを文字表示して提示する依頼ができる	33.3	< 71.4
災害時に、近隣の人から情報を得られると思う	22.2	< 42.9

## 結果

・聴覚障害者群で他の群に比べて

**比率が低かった項目**

「呼子(または、代わるもの)を携帯している」

「備蓄がある(食料、飲料水、簡易トイレ)」

「地域の防災訓練に参加したことがある」

「市の防災ハンドブックを読んだ」

「自宅の最寄りの避難所の場所を知っている」

・比率が高かった項目

「懐中電灯を携帯している」

「市のホットメールに登録している」

・聴覚障害者群9名全員が「市役所が発行した防災ハンドブックについて手話で説明を聞きたい」と答えた。

・筆談: 「依頼する」66.7%(聴覚障害者群)

「避難所で聴覚障害者に気づいたら、避難所の人に筆談が有効なことを伝えられる」60%(支援者群と民生委員群)

・「聴覚障害者の避難所は一次避難所と別にあつたらよいと思う」: 3群共に50~60%であった。

## 考察:

聴覚障害者では災害準備比率が低かった理由

1. 防災情報が不足

→手話による防災ハンドブックの説明

2. 聴覚障害に応じた準備方法

→危険を知らせる呼子の代わり: 音と共に、あるいは音でなく光、風、振動、画像などが変化する器具。例えば、握ると音と空気が出るおもちゃ(シャウティングチキン等)、スマートフォンのアプリケーション(SOSホイッスル、SOSライト等)

3. 筆談を依頼する/される練習の必要性

4. 聴覚障害者の避難所は一次避難所と別にあつたらよいのか?

・筆談による必要最小限の情報入手: 一次避難所

・手話通訳による納得できる情報入手: 優先派遣場所を決めておく

・当事者同士の手話によるコミュニケーションによる安心感: 集合場所を当事者同士で決めておく

・夜間の照明など手話を自由に使う環境の設定: 一次避難所